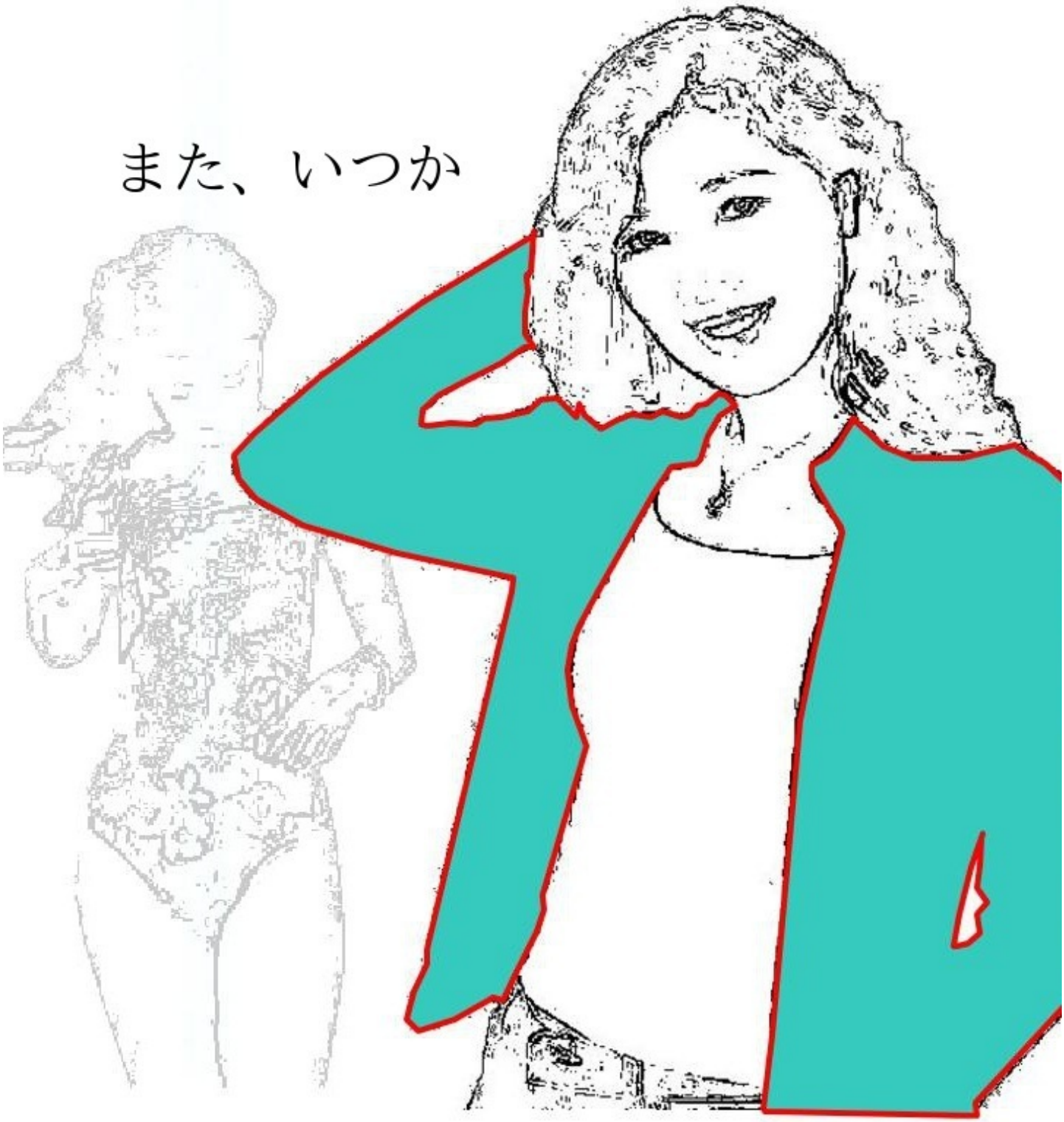
気になる彼女（あいつ）

また、いつか



kajioboy

拓海の会社に碧から電話が入った。
今夜、アパートへ来ると言う。
（碧か～。彼女とは何ヶ月振りだろう？）
拓海は残業をキャンセルして急いで帰った。
駅から急いで戻ると、アパートの前で碧は待っていた。
「は～い、拓海」
久しぶりに見る碧は、何処と無く大人びているように見えた。

「鍵の場所、変わってないから、部屋に入ってれば良かったのに・・・」
「誰か女の人と会ったら大変でしょう？」
「そんな彼女なんていないよ、残念ながら・・・」
「成子とはその後どうなの？」
「知らない。山崎とヨーロッパへ行ったきりだし、連絡ないし。」
「やっぱり、諦めたの？」
「そういうことかな」
拓海は、熱いコーヒーを碧に出した。
碧は左手でそ～っとコーヒーカップを持つ。
その仕草は未だに変わっていなかった。
「久しぶりに見ると、色っぽくなったなぁ、碧」
突然の事にドキッとする碧。
「何、言ってんのよ。変わってないわよ」
「そうかぁ？　こうやって、正面から見ていると別人みたいだ」
「化粧が少し濃くなっただけよ。相変わらずねぇ」
「ははぁ、つい昔に戻ったみたいだ」
碧はにこりと笑う。
「でも、よくこんな汚い部屋に来る気になったなぁ。外でも良かったのに」
「男の部屋ってこんなものでしょう？　昔と変わって無くてよかった」
「変わらないさ。あの時のままだ」
コーヒーを置いて、部屋の中を見回す碧。
「こんな部屋でも、私にとったら思い出の部屋なのよ」
「こんな部屋でわるかったな！」
「ごめん、いい意味で言ったのよ」
「そうかぁ？　でも、就職した際に引越しでも、考えていたんだが・・・」
「そうなの？　でも、ここでいいじゃない。ここって妙に落ち着くのよね・・・」
「はは、引っ越さなくて正解だな～」
ふふっと笑みを浮かべる碧。
拓海は、タバコと、１００円ライダーを取り出した。
「なに、拓海、１００円ライターなの？　」

「そうだけど・・・？」
碧はバッグからカルチェのライターを出して、テーブルに置いた。
「これ、あげるわ。私、タバコ止めたの」
「へぇ～　止めたのか？」
「うん、職場が禁煙だし・・・だから、この際、止めたの」
拓海はライターを手に取ると、
「これ、高そうだなぁ？　いいのか？」
「うん」と頷くと、コーヒーを飲みだした。
セブンスターの白い煙が部屋の中を漂う。
そのタバコを吸う仕草を見る碧。
「・・・・・」
カルチェのライターをカチカチと鳴らす。
碧はそれをじっと聞きながら拓海を見ている。
碧の妙な視線が気になってきた。
「碧、夕食まだだろう？　お腹空いた？」
ううん、と首を振る碧。
「拓海は？　お腹空いた？」
「うん、少しな。軽く飲みに行こうか？」
と立ち上がった。
「いい。此処がいいの。昔のようにここで話したいわ」
「ここで？　こんな所でいいのか？」
うんと頷く碧。
そうか、と言うと、拓海は冷蔵庫を覗き込んだ。
運よく、２日前に買い溜めしていたビールと日本酒があった。
ビールとウインナーとツナ缶、そして豚肉を取り出した。
「え～っと、これとキャベツとナスしかないけど・・・」
碧は立ち上がり、
「これだけあれば良いんじゃない？　ちょっと、冷蔵庫開けるね」
と、冷蔵庫と野菜室を確認し、食器棚を開けた。
「オッケイ。野菜、使っていい？」
「ああ、いいよ。適当に炒めれば、なんとかなるし・・・」
碧は狭い台所に立ち、慣れた手つきで包丁を鳴らしている。
そんな姿を見ていると、やはり学生時代を思い出す拓海。
瞬く間に、テーブルに料理が並んだ。
碧は缶ビールをわざわざコープに注いだ。
そして、２人は向かい合ってビールで乾杯した。
ぐいっと飲み干すと、さっとビールを注ぐ碧。

「お、サンキュー。では、食べてみようかな・・・」
野菜炒めを一口食べた。
「どう？　味の方は？」
「うん、美味い。さすがぁ女性だな～　俺、こんなに美味く作れないなぁ」
今度はウインナー炒めを食べる。ピリッと辛いスパイスが口の中に広がった。
「おう～　これも美味いな～」
パクパク食べる拓海を見て、嬉しそうに微笑んでいる碧。
結局、碧が食べる暇もなくほとんどたいらげた拓海。
「あ～あ、美味しかった。」
「よかった～。今まで作ってあげなかったから味の保障はなかったけど～」
「美味かったよ」
「本当に？」
「ああ、本当さ。もっと、早く頼めばよかったなあ～」
ふふと笑いながら、残ったナスを摘む碧。
「碧、お茶飲むか？」
「うん、やろうか？」と立ち上がろうとする碧。
「いい、座ってな。俺がやるから・・」
拓海は食べ終わった食器を片付け、テーブルを拭き、ポットのお湯を用意した。
緑茶のティーパックを出してお湯を注いだ。
碧は、ティーカップを手にして、
「ありがとう」と、まだ熱いお茶を飲む。
「熱いだろう？」と、拓海も熱いお茶をすすり飲む。
一息ついたところで碧が話しかけてきた。
「どう、仕事の方は？」
「まだ、新米だから覚えるのが多いよ。毎日が勉強さ」
「へぇ、コンピュータって大変なのね～」
「そうだな、日本はアメリカに比べてまだまだ遅れているから追い付くのが大変なんだ」
「今日は残業だったんじゃない？」
「一日ぐらいは大丈夫だ。納期までまだ時間は十分あるから・・・」
「そう、無理させてみたいでごめんね」
と言うと、熱いお茶を息を吹きかけ冷まそうとした。

何故か今夜の碧は清生らしくいつもと雰囲気が違っていた。
あの、学生の頃の図々しさが無く、社会人としての姿勢が身についたのだろうか・・
拓海は、また、カルチェのライターを手にして言った。
「何か、話があるんじゃないのか？」
ティーカップを持つ碧の手が一瞬、ピクっと動いた。
「何かあったのか？」
「・・・・・・」
お茶をじっと見つめていたが、うんと頷いた碧。
そして、静かにテーブルに置いた。
拓海はタバコを１本取り出した。
「話してみたら・・・」
「うん」と頷く碧。
「会社の事？」
「うん」と頷く碧。
「仕事、上手くいってないのか？」
今度は横に首を振る碧。
「今のところ順調よ・・・」
「そう・・・・・」
「今度、特派員に選ばれてフランスへ行くことになったの」
「へぇ～凄いじゃないか～。入社してまだ３ヶ月なのに、凄いな～」
「うん。でも英語圏じゃないから言葉が大変だけど・・・」
「一人で行くのか？」
「ううん、先輩と一緒・・・明日の夕方、出発なの・・・」
「え？　明日？」
「うん」と頷く碧。
「先輩って・・・女の人？」
「そうよ。当たり前じゃない」
「そうかぁ、良かった」
クスっと笑う碧。
「へぇ～一応心配してくれたんだ？」
「そりゃぁ聞くさぁ。特派員って言ったら男の世界で、荒々しいイメージがするよ」
拓海は照れくさそうにタバコを咥えた。
そんな拓海を嬉しそうに見つめる碧。
「それで、どのくらいなんだ？　１ヶ月か？」
「・・・・・・」
碧は急に黙ってしまった。
そしてテーブルに顔を伏せた。
「どうした？」

上向き加減に顔を上げて拓海を見つめた。
なぜかもの哀しい瞳をしている碧。
「拓海、お願いがあるの」
「うん？」
「手を出して・・・」
「手を？」
「お願い」
やはり、いつもと様子が違う碧。
拓海はタバコを咥えると、左手をテーブルの上に置いた。
碧はその拓海の手を両手で握りしめて頬にあてた。
碧の頬の温もりが手をツタってくる。
そして目を閉じながら言った。
「もう、行ったきりで、帰ってこないつもりなの・・・」
拓海の左手がピクリと動いた。
「え？　どういうこと？」
碧は強く拓海の手を握りしめた。
「最低１０年は海外の支店を転々とするの・・・」
「１０年？」拓海の手が動いた。
「その後は、希望者は帰国できるんだけど・・・」
碧は更にその手を強く握り締めた。
「１０年って・・・そんなに長いのか？　１，２年くらいじゃないのか？」
誰からか聞いた事あるけど、普通は入社して１年間は教育して、それから海外のはずだ。
また、新人レベルの社員が１０年間行ったきりなんて聞いた事ない。
「碧、おまえ、行くつもりか？」
「うん」と頷く碧。
「１０年間、帰国しないつもりなのか？」
「うん」と頷く碧。
「なんだよ～　それって、冗談だろう？」
碧は静かに目を開くと、拓海を見つめた。
「だから、拓海に逢うのも今日が最後なの・・・」
「ちょっと、待てよ。今日が最後って、話が飛躍しすぎて、解んないよ～」
咥えたタバコが口から落ちた。
碧は拓海の手を離すと、うつむいた。
「ごめんね、こんな話しちゃって・・・」
微かに肩が震えていた。
「碧・・・本当に明日から海外へ行ったきりになるのか？」
顔を上げてじっと見つめる碧。その瞳にはやがて大粒の涙が湧いてきた。

「だから・・・今日は、日本での最後の想い出づくり・・」
「思い出作りって・・」
言葉に詰まる拓海。
「急に押しかけて来ちゃってごめんね、拓海」
「なあ・・・」
碧に詰め寄り、問いかける拓海。
「なあ、それって、絶対行かなきゃならない仕事なのか？　断れないのか？」
首をふる碧。
「ううん、私から希望した事なんだ。だから、行くの・・・」
「でも、行ったきりなんだろう？」
碧はバッグを持つと、立ち上がって背を向けた。
「私、本当はねぇ、拓海の事、初めて逢った時からずっと好きだったの・・・」
「え？」
「でも、拓海は成子の事が好きだったでしょう？　私も成子の事すきだったから・・」
「・・・・・」
「成子の好きな人だったから・・それに、拓海とはいつも一緒のサークルだったし・・」
「碧・・・・」
「最後に、拓海の顔、見たくて・・・ごめんね」
碧はそう言うと玄関へまで行くと、靴を履き始めた。
「ちょっと、待てよ」
拓海は立ち上がると碧の前に立った。
「それじゃ、今夜は別れを言いに来たのか？」
「うん」と口を接ぐんで頷く碧。
「碧・・・」
碧はドアを開けると部屋を出た。
そして、振り向くと、潤んだ瞳で、
「今夜はありがとう。元気でね・・・またね、拓海・・・」
と言うと、静かにドアを閉めた。
ドアの前に呆然と立ち竦む拓海。

今日の碧の妙に清生らしく、いつもと違う雰囲気、その全てが腑に落ちた。
拓海はテーブルに座ると、先ほどのタバコを口にした。
そして、ライターを掴んだ。碧がくれたカルチェのライターを・・・
シュボっと心地よい音がして炎が揺らめいた。
碧の飲んだティーカップが炎の奥に揺らいでいた。
（これでいいのか？・・・）
２年間付き合った成子とはいつの間にか自然消滅。今は新しい彼氏とヨーロッパだ。
大学時代の付き合いってこんなものさ・・・
社会に出てしまえば、子供のお付き合いは終わりなんだ・・・
社会に出て現実を見れば、学生なんて雀のお喋りみたいなものさ・・・
成子も新しい人生を、大人の人生を歩んでいる。いつまでも引きずっては駄目だ・・・
碧だってそうさ。きっと、そうに違いない。今日はけじめをつけに来たんだ・・・
碧だって新しい人生を始めるんだ、きっとそうさ・・・
タバコの白い煙が、部屋の中をゆっくりと漂っている。
『成子の好きな人だったから、私、諦められたんだ・・・』
『拓海の事、初めて逢った時からずっと好きだったの・・』
碧の言葉が響いてくる。
こんな別れでいいのか・・・
このままでいいのか・・・
碧と２度と逢えないかもしれない・・・
なんだろう？　この胸の高鳴りは？　この痛みは？
時間は逆戻りはしない。
「あとで・・」はもう無いのだ
時計の針は１０時を指していた。
拓海の心の中で誰かが叫んだ。
（何やってんだ～）
拓海は、立ち上がり急いで靴を履くと部屋を出た。
そして夢中で暗闇の中を走り出していた。
先の事は解らない。
だから、今なんだ・・
今しかないんだ・・・
明日では、駄目なんだ・・・
公園の近くまで来ると、碧の姿が見えてきた。
後ろを振り向いた碧は、走ってくる拓海を見て驚いていた。
「拓海、どうしたの？」
拓海は碧の前に立つと、少し息を整えて碧を見つめた。
「どうしたの？」
拓海は碧の手を取った。

「もう少し、居ろよ」
「え？」
驚いて、その手を払う碧。そして後ずさりした。
「もう少し一緒に居ろよ。碧・・・」
拓海は碧を見つめた。
碧の肩が微かに震えた。その肩を掴んだ拓海
「・・・・・・」
「もう、明日は、逢えないんだろう？」
うんと頷く。
「もう少し・・お前と一緒に居たいんだ・・・碧」
首を振る碧。
「わざわざ、それを言いに来たの？」
「ああ、そうだよ。なぁ、碧、もう少し一緒に居ろよ・・・」
碧は首を振りながら拓海の手を振りほどいた。
「今日は・・・今夜だけは、お前と一緒にいたい・・・」
「駄目よ・・・」
碧は震えるように小さな声で言った。
拓海はその肩を抱き寄せた。
「駄目よ、決心が鈍るから・・・」
拓海の手に涙が落ちた。

翌朝、一枚のメモがテーブルにあった。
『拓海、ありがとう。またいつか・・・』